

機関番号：25201

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21730421

研究課題名 (和文) 虚妄と切実の間—改革開放以降における「欲望」とイデオロギーとの関係をめぐって

研究課題名 (英文) Between the False and the Desperate: "Desire" and Ideology in Post-Reform China

研究代表者

王 鳳 (Wang feng)

島根県立大学・総合政策学部・助手

研究者番号：90528001

研究成果の概要 (和文) : 改革開放以降の中国の社会意識の変化に関わる各種の言説を考察することによって 80 年代と 90 年代以降という二つの大きな区切りがあり、人々の意識やその表象に決定的な影響を及ぼすものがそれぞれ「正しさ」の論理と「できる」論理であると結論した。また、社会現実を語る際に用いられる時代的ディスコースの変化は、90 年代の「奮闘」(頑張っていること) から 2008 年前後の「棟梁」(成功そのもの) に移っていくという重心の転移があったのである。

研究成果の概要 (英文) : By analyzing various discourses on the transformation of social consciousness in post-reform China, this research drew a conclusion that there is a break between the 1980s and the 90s, and the former is characterized by the logic of "correctness", while the main feature of the latter can be defined by the logic of "capability". It also showed that whereas in the 1990s the dominant discourses on social reality were formed around the conception of "fighting/struggling", around 2008 the emphasis came to be placed on the conception of "success" per se.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会学、社会意識研究

科研費の分科・細目：社会学・文化、宗教、社会意識

キーワード：社会意識、文化装置、「癒し」の論理、イデオロギー、欲望

1. 研究開始当初の背景

1978年以降、中国では通称「改革開放」との国策が採択されたが、これによって中国社会はそれまでの「階級闘争を要とする」政治社会から「経済建設」を中心とする社会へと切り換わった。30年間あまりの月日が経た中で、社会

構造に大きな変化が起こり、人々の意識の表出の仕方も大きく変わった。社会主義を立国の根本とする国に、市場経済という経済システムを取り入れることによって、人々の世界を眺める際の解釈の枠組み=パラダイムに大きな変化があったとともに、国家・社会によって提起され

た人々の人生や生活に関する解釈の仕組みに大きな変化があったことを意味するだろう。このような解釈の仕組み、社会の捉え方がいかなる時期にいかなる表現をしていたのか、これを究明するのが本研究の根本的な問いである。

これまでには、改革開放による中国社会の変化を捉えるための研究は階層研究、消費文化研究をはじめとして多くの優れた研究成果があり、階層構造の変化によって人々の実際の社会生活での位置づけの変化に関する問いがある程度解明できたと思われる。一方、社会によって提起された人々の生活への解釈の仕組みの変化という角度からの研究があまり見当たらない。しかし、これら研究は、近代化の過程を歩む中国という存在を前提に、いささかマクロな視点でその社会構造の変化に焦点を当てたものである。換言すれば、中国社会のイデオロギーの側面における変化、またこれに伴う生活者の意識変化に着目するミクロな研究、さらにこれらの関係性を捉えようとする試みは皆無に等しい研究状況であるということである。一方、中国における文学研究やカルチュラル・スターディズなどの領域においては、「モダニティ」の旧枠から脱皮し、中国社会で起こった思想的かつ文化的状況の変容に注視し省察的考察に基づいて、政治社会の「世俗化」とそれによる「新イデオロギー」の成立を実証する研究が生み出されつつある。だが、これら社会意識の変容を捉える一見明快な結論は、文学テキストから抽出された理念型であって、現実を生きる生活者の意識や対応という複雑な様相をどこまで反映しているかが検証されていないという憾みがある。

本研究課題は、現代中国社会の変動を巡って展開されているかかる業績に立脚しつつも、『中国青年』（1978年～2008年）30年間分を用いた文献研究及び北京市をフィールドに実施するライフヒストリー調査に基づき、改革開放後の中国社会で用いられている社会に対する解釈の仕組み、捉え方がいかなる時期にいかなる表現をしていたのか、また、文化装置として人々の意識

に作用する要素としての「新イデオロギー」と現実の中国社会に生きる生活者の「欲望」との関係性の解明を試みた。

2. 研究の目的

(1) 改革開放以降の中国社会で起こった時代的ディスコースの変化を把握する。文化装置として人々の「欲望」を大きく規定すると思われるイデオロギーに注目し、改革開放以降の中国社会で起こった歴史的文化的状況の変容を先行研究に依拠しつつ整理し、国家意志を代表するイデオロギー、理想主義的イデオロギー、さらに市場価値や消費主義を内実とする「新イデオロギー」という要素が並存・交差する状況として描き直す。

(2) 「理想主義」の高揚とされる80年代の再考察。(1)の考察を踏まえ、中国の政治社会における世俗化過程から消費主義へと移行するイデオロギーの変容をもっとも明瞭に照らし出す、中国共産党青年機関雑誌『中国青年』（1978—2008）を素材に「理想主義」の高揚とされる80年代の中にも価値観の交錯が見られ、またそこで規定される思想空間が実は欲望の表象であることを実証的に明らかにする。

(3) 欲望と「新イデオロギー」との関係性の析出。北京で二度のライフヒストリーの聞き取り調査を敢行し、生活者における「新イデオロギー」とはいかなるもので、社会生活のどの部分に作用し、欲望とどのような折り合いをつけ、どの程度参照体系として受容されていくのかを中心に取りまとめる。政治社会のイデオロギーと同様の思想空間を形成する新イデオロギーと、それに規定された状況に生を営まざるを得ない生活者の欲望との関係（親近性・疎遠性）について考察する。その際、追従型、反抗型、言行一致型、言行不一致型、現状満足型、現状不満足型などの指標を立てた上で類型化を試み、どの類型に属する者も常に欲望を下地に、「時代精神」に対する機動性を備え、主体性を保持しつつ社会生活を営む存在であることを析出する。

3. 研究の方法

本研究課題は、文献研究と聞き取り調査を交え、文化装置として人々の欲望に作用するイデオロギーの動向を多面的に捉えていく作業と、こうしたイデオロギー並びに生活者の欲望との関係を明らかにするという二つの部分に大きく分けることができる。これらの目的を達成するための具体的な行動計画は、以下の通りである。

中国社会におけるイデオロギーの変容を考察する際、二つの方法によりアプローチを行う。第一に、政治社会の世俗化過程を経て、消費主義へと移行する価値観の変容の様相を最も取り上げている中国共産党青年機関雑誌『中国青年』（1978-2008）を素材に、通時的な社会を捉える時代的ディスコースの変化を辿る。第二に、これを補完する二次資料として、文学研究、カルチャスタディーズ、価値観研究などの既存のイデオロギーを対象にした研究論文を利用する。次いで、イデオロギーと生活者の欲望との関係を考察するにおいては、基礎データとして聞き取り調査の結果を用いる。この聞き取り調査では、これまでの経験と人脈を踏まえ、調査を実施した。

4. 研究成果

改革開放以降の中国の社会意識の変化を考える際に、それに関わる各種の言説を考察することによって80年代と90年代以降という二つの大きな区切りがあり、人々の意識やその表象に決定的な影響を及ぼすものがそれぞれ「正しさ」の論理と「できる」論理であるという仮説を立てた。この仮説を前提に、筆者は中国共産党青年団の機関誌である『中国青年』（1978年～2008年）を資料として用い、それぞれの時代において国家・社会が若者へのまなざし、若者に与えようとした意味にどのような変化があったかを整理し、さらにそれぞれの時代において若者がどのような「不安」に直面し、その「不安」に対して社会がどのような「癒し」の論理/文化装置を用意していたかについて考察し、次のよう

なことを発見した。

(1) 一つ目は、80年代の若者は、「近代化を達成するための新しい長征」という国家目標が新たに樹立された中で、若者は「青年」と呼ばれ民族と国家の復興を担う存在として収斂されていった。90年代以降に入ってから、若者はそういった政治的な目標から放出され、「ただの若者」となったが、一方、ただちに市場経済システムに相応しい存在として期待され、加熱されていった。

(2) 二つ目は、「純真で理想主義的」と描かれた80年代においても若者たちは実際に常に立身出世の競争に立たされ、多くの欲望と不安を抱えていた。そのような不安に対応するように社会から用意された「癒し」の論理は民族や国家のために努力することの大事さであったという指導的な立場からの教訓であるのに対し、90年代以降において市場経済の競争を目の前に抱えている失敗の「不安」に対して、第一人称で自分の人生を語る若者の文章を多用することによって、「あなただけではなく、みんなもそう」という同じ背丈からの助言の形式となった。

(3) 三つ目は、2008年前後以降において、若者への視線にもう一つの変化があった。それは、「頑張っている」若者への注目から、「成功した」若者への注目の変化があり、そこでもう一回、若者の抱えている「不安」への「癒し」として、指導的な立場が現れたのである。これは、ある意味では改革開放が行われて30年以降の今日の中国社会において、社会階層構造が少しずつ安定化してきており、新たな「成功者」の理想像が樹立されたことを意味するだろう。

以上、『中国青年』雑誌の分析を通して若者へのまなざしが政治的な存在として「青年」から生活者としての「読者」に変わり、さらにその注目する「読者」が「奮闘している若者」から「先駆け」「棟梁」と称される成功者に切り換わったと析出したが、北京で行われたライフストーリーの聞き取り調査を通して、上記で析出し

た「新イデオロギー」時代と規定された状況に生を営まざるを得ない生活者の欲望「新イデオロギー」との関係性の析出し、追従型、反抗型、言行一致型、言行不一致型、現状満足型、現状不満足型などの指標を立てた上で類型化を試み、どの類型に属する者も常に欲望を下地に、「時代精神」に対する機動性を備え、主体性を保持しつつ社会生活を営む存在であることを析出した。

以上の分析をもって、次のような点に本研究の意義があると思われる。90年代以降、中国社会で社会現実を語る際に用いられるディスコースは、「階級」「革命」のパラダイムを改め、社会科学的な語り方をするようになってきたとよく言われるが、『中国青年』雑誌を資料にして考察を行った本論文は、この点をより詳細に確認しただけでなく、時代的ディスコースの変化が起こってから、その語り方が具体的にどのような様相を呈していたかという点を明らかにしたことに意義があると言えよう。また、現代の中国社会を覆うイデオロギーの交錯した状況を検証し、聞き取り調査の結果分析を通して、政治社会における個人が主体性なく一方的に抑圧された存在でないのと同様に、「新イデオロギー」時代と一般に規定された状況の中で生を営む個人も、単に虚妄な欲望に支配された主体性のない存在ではないことが析出された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

王鳳「90年代以降の社会意識の変化に関する言説の一考察」『北東アジア研究』査読あり第20号、2011年、p81~107

[学会発表] (計1件)

王鳳「90年代以降の社会意識の変化に関する言説の一考察」日中社会学会第22回大会自由報告、2010年6月、一橋大学

[その他]

ホームページ等

『北東アジア研究』第20号

<http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/org>

[anization/near/41kenkyu/kenkyu20.data/20-07_wang.pdf](http://www.hamada.u-shimane.ac.jp/research/org/anization/near/41kenkyu/kenkyu20.data/20-07_wang.pdf)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

王鳳 (Wang Feng)

島根県立大学・総合政策学部・助手

研究者番号：90528001

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：